

【天気予報及び概況】

天気は数日の周期で変わりますが、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
気温は、高い見込みです。降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

	平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	降水量 (mm)
2025 年	20.0	23.9	16.6	185.0
2024 年	20.4	24.5	17.0	168.5
2023 年	18.2	22.9	14.1	40.5
1991～2020 年	18.6	22.6	15.0	142.5

※気温は、10月の平均値（気象庁）

【作 物】

1 落水

落水時期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ってください。落水が早いと、登熟不良となって品質低下を招くとともに、稈が弱まり倒伏しやすくなります。

2 収穫

刈取り時期は、早過ぎると未熟米や青米が多くなり収量も少なくなります。また、遅過ぎると茶米や胴割粒が発生するとともに、食味や品質が低下するため、下表の収穫適期基準を参考に適期刈取りしてください。

【品種別収穫適期基準】

区 分	ヒノヒカリ	にこまる	ひめの凜
出穂後積算温度 (℃)	900～1,100	1,000～1,150	930～1,000
最長稈黄変率 (%)	85	85～90	85
出穂後日数 (日)	40～46	42～48	37～43

3 乾燥

収穫後は速やかに乾燥機に張り込み、乾燥を始めてください。乾燥速度は1時間当たり0.8%以内とし、胴割れや乾燥むらを防ぐために急激な乾燥はしないでください。過乾燥は品質や食味が低下するので、仕上げ水分は14.5%以上15%未満が目標です。

4 調製

事前に粃摺り機の点検や部品（ゴムローラ等）交換や調製を行い、玄米の肌ずれや胴割れ米の発生を防止してください。
調製はライスグレーダーを使用し、整粒歩合80%以上を目標にしてください。ふるい目は、1.85mm以上を使用して、未熟粒を除去し、上位等級に仕上げてください。 <松本>

【野 菜】

1 さといも

(1) 収穫・選別

収穫した芋に**過剰な水分**があると**腐敗芋**の発生となります。圃場の排水を図るとともに収穫後は**表面やかぎ口を確認**し、余分な水分を除去した状態で出荷してください。

分割や根取りをする際に、芽つぶれ芋や害れている芋等の規格外品と**かぎ口が赤い芋や腐敗芋**が混入しないように選別を徹底し、計画的に出荷してください。

(2) 病害防除（種芋対策）

次年度の種芋を確保する圃場は、充実した種芋確保のため防除してください。高温多湿は、疫病の発生を助長するので「ダイナモ顆粒水和剤（収穫21日前まで）、ピシロックフロアブル（収穫前日まで）」で防除してください。出荷予定の圃場は、**農薬の使用時期**（収穫前日数）に注意してください。 <徳永>

2 やまのいも

茎葉が完全に黄化するまでは、土壌の過度の乾燥が品質低下を招くので、水管理をしてください。また、台風等で溝に水が溜まると芋が腐敗する恐れがあるので排水にも注意してください。 <三谷>

3 そらまめ

(1) 高品質安定生産のポイント

①土づくり②高うね栽培（排水対策）③適期播種（10月7日～15日頃）④誘引による採光の徹底です。

(2) ポット育苗

種子は80/10a程度準備し、「おはぐろ部分」を斜め下にして、種子の8割程度差し込み、2割は見えるように播種します。
アブラムシ対策として寒冷紗等で被覆してください。

(3) 施肥・定植

土づくりには、堆肥3,000kg/10a、苦土石灰100kg/10aを施用し、基肥としては、定植の1週間前に苦土重焼燐10kg/10a、菌根甘60kg/10aを施用してください。マルチ張りは土壌に湿りのある状態で行ってください。
定植苗は、本葉2枚半程度の若苗（播種後2週間程度）とし、深植えにならないよう注意してください。U字仕立ての栽植密度は、畝幅150cm×株間50cmです。アブラムシ防除のため、植穴にアドマイヤー1粒剤を1株当たり2g土壌混和し、根を傷めないように定植してください。 <徳永>

【果樹】

1 温州みかん

(1) 収穫

収穫は、果実品質のバラツキを避けるために着色が早い樹冠外周、上部から分割採取し、果実を丁寧に扱って、腐敗果の発生・混入を防いでください。

(2) 樹勢回復

樹勢を回復させ、耐寒性の向上と翌春の花芽分化を促すために、収穫期前後の秋肥の施肥と収穫後の液肥葉面散布を行います。また、降雨がなく土壌乾燥する場合は灌水に努めてください。

2 中晩柑類

(1) 甘平、愛媛果試第28号（紅まどんな）

甘平は、裂果の発生が落ち着く10月上中旬に、最終着果量12～13個/㎡に調整します。品質向上のために灌水量を徐々に減らし、収穫までは土壌乾燥が続く場合は、少量灌水を行います。

愛媛果試第28号（紅まどんな）は果皮障害発生を抑制するために、簡易屋根掛け栽培は10月上旬に天井ビニールを被覆、露地栽培は着色が進んだ頃（8分着色以降）に果実の袋掛け、または専用資材を用いて樹体被覆を行ってください。収穫まで土壌乾燥を促し、適度な水分ストレスを与えることで糖の蓄積を促します。

(2) その他の中晩柑

内なり、裾なりの見落とした果実、果梗枝が太く粗皮で品質が劣る大玉果、小玉果、キズ果等を摘果し、正品率の向上を図ります。

収穫までは、降雨がなく土壌乾燥が続く場合は灌水を行います。

(3) 病虫害防除

カメムシの飛来を確認したら速やかに薬剤防除を行ってください。また、かような病に罹病した夏秋梢や果実は除去し、必ず園外に持ち出して処理してください。 <三谷>

【花き・花木】

1 球根養成栽培

アネモネ、ラナンキュラスともに播種適温は10～15℃で、10月中旬以降が適期となります。20℃以上での播種は発芽不良となるので、早播きは避けます。

○アネモネ

《播種》

播種量は1kg/10aを目安とし、乾いた土で種をほぐし均一に播種します。堆肥等で種が隠れる程度に覆土し、ドラム缶で鎮圧します。

○ラナンキュラス

《播種》

播種量は7～10g/100㎡、堆肥等で種子が隠れる程度に覆土し、ドラム缶で鎮圧します。

《被覆と灌水》

不織布やワラなどで被覆し、乾燥を防止し随時灌水します。2～3週間後、発芽し始めたらず々に被覆資材を取り除きます。

2 シキミ

害虫の発生が見られたら、トレボン乳剤2,000倍を散布します。輪紋葉枯病が見られる圃場では、トップジンM水和剤1,000倍を散布します。

病害を予防するために、下枝を伐採し、樹間を広く取り、通気性を良くして過湿を避けます。

3 観賞用花木の生産振興

・ピットスポラム：光沢のある波打ったグリーンの葉、（母の日、9～12月）
・ヒムロスギ：クリスマスリースに使う銀緑色の葉（11～12月）

それぞれフラワーアレンジメントに用いられ、安定的な需要が見込まれます。出荷時期は（ ）内です。

10月は挿し木の適期です。栽培に関心のある方はお問い合わせください。 <浜田>

【畜 産】

1 衛生害虫対策

10月の平均気温は平年より高い予想で、引き続き残暑対策が重要です。また、暑さのピークを過ぎた9～10月は、蚊が越冬のため活動を活発化させます。蚊やサシバエ等の衛生害虫は、ストレスによる生産性低下だけでなく、伝染病を媒介するため徹底した対策が必要です。幼虫は、畜舎内の糞がたまった場所や残飼、汚水が溜まる場所で育ちます。こまめな清掃で生育環境を減らすことが基本です。さらに、幼虫から蛹を狙った昆虫成長制御剤（IGR剤）の散布や、薬剤付き防虫ネット・カーテンの設置も効果的です。

2 寒暖差への対策

秋は昼夜の寒暖差が大きく、特に若齢の家畜はストレスを受けやすくなります。夜間は送風機を止める・緩める、開閉式カーテンを閉めるなど、1日の温度変化を緩やかにする対策が重要です。畜舎内に温度計と湿度計を設置し、数値を客観的に捉えながら、対策の有効性を常に見直しましょう。

3 冬に向けた設備点検

本格的な寒さが来る前に、給水配管ヒーターの作動確認や保温材の巻き直し、車両消毒装置などの不凍液の準備などの凍結防止対策を進めましょう。 <真鍋>